## 2021年3月の行事予定表

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 月 | | 16 | 火 | |
| 2 | 火 | | 17 | 水 | |
| 3 | 水 | | 18 | 木 | 祈祷会 |
| 4 | 木 | 祈祷会 | 19 | 金 | |
| 5 | 金 | | 20 | 土 | |
| 6 | 土 | | 21 | 日 | 礼拝式 |
| 7 | 日 | 礼拝式(聖餐式)、教会役員会 | 22 | 月 | |
| 8 | 月 | | 23 | 火 | |
| 9 | 火 | ナザレン教団・74回年会（本部） | 24 | 水 | |
| 10 | 水 | | 25 | 木 | 祈祷会 |
| 11 | 木 | 祈祷会 | 26 | 金 | |
| 12 | 金 | | 27 | 土 | |
| 13 | 土 | | 28 | 日 | 礼拝式（受難週） |
| 14 | 日 | 礼拝式 | 29 | 月 | |
| 15 | 月 | | 30 | 火 | |
| | | | 31 | 水 | |

**3月お誕生・洗礼記念日の皆様、おめでとうございます。**

### 編集後記

◇ 日曜日の礼拝で歌う讃美歌集は、「讃美歌21」が使われています。コロナ禍のために、You-Tube で礼拝参加するときも、パソコンやスマホを前に、教会堂で歌っている皆さんと共に声を合わせて神様を賛美できるひとときです。

◇ 人間だけが神を賛美する、礼拝できる存在として創られたということを厳粛に受け止めるのも、自由に集まれないこういう時期だからこそかもしれません。

◇ ソメイヨシノの冬芽を喜び待つと共に、4 月のイースター（復活祭）への期待に胸が高鳴っています。

# 教 会 月 報

2021年3月
No.358

岡山ナザレン教会 月報編集委員会

## 信教の自由を守る日

「 平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。」
マタイ福音書５章９節

去る 2 月 11 日、「信教の自由を守る日」として集会が開かれました。今年度は新型コロナウイルスの出現により日本(国内の限定された地区に緊急事態宣言発令中)のみならず、世界が大混乱に至っています。このような状況下、「コロナ禍の社会におけるキリスト教会の使命」と題して開催され、参加者は会場出席者３７名、リモート出席者３３名、合計７０名に上り盛況でありました。講師３名(①吉田隆牧師、「災禍における教会の歴史から学ぶ教会の課題」―神戸改革は神学校校長)。②松浦悟郎司教(ローマ・カトリック教会名古屋教会司教)「全体主義傾向下におけるキリスト者の使命」。③土居弘幸医師(岡山大学院特任教授)「コロナを正しく恐れる―コロナ終息へのプロセスと対応」。)による発題を受け、大いに啓発された次第です。

そこで問われたのはキリスト教の信仰が試され、問われている事実であります。歴史的に感染症は長い歴史の中にありました。キリスト教会では加持祈祷(病気平癒や災いの除去などの現世利益を祈ること)にとどまることなく、紀元３世紀には古代ローマで発生した疫病で１日に５千人の死者が出た時、誰しもが死を免れないこと、信仰によって死の恐怖を退け、死後において永遠の命を考えようと勧めています。また、現実には信仰者が行った貧者に対する救済の行為には、キリスト教に反対した当時のローマ皇帝でさえ称賛したと言われます。松浦司教の視点は全体主義化しつつある現状を憂い、キリスト教における民主主義の確立を迫るものでありました。土居弘幸兄弟は、ご自身の専門家として資料を用いて説得力(ワクチン接種に関して)ある提言でした。

牧師　永松　清

## 「わたしの信仰はコレで育てられました」　K. F. 姉

### ～マイブームは聖書～

　先日、取引先の営業マンから「先生（私のこと）、開業１０周年おめでとうございます！」と言われた。ということは、役員として教会に奉仕して１０年。仕事も教会も、本当に一生懸命の１０年だった。

　岡山を離れて以来、15 年ぶりに通うようになったナザレン教会はすっかり変わっていた。新米信徒だった私も今度は役員。洗礼を受けただけで聖書の学びをさぼってきた私が、役員になって一番

　慌てたのは奨励だった。「証しのちょっと長いやつをタマ～に話すだけだから！」って言われても、みなさんの前で２０分以上も信仰の話をする？どうすればいい？どこから手を付ければいい？とりあえず聖書読む？こうして手さぐり&ドロナワの私の信仰の学びが始まった。

　これまでの私の奨励は、2013 年春のケセン語訳聖書に始まり、讃美歌の歴史、科学と宗教の話、礼拝学などなど。改めて読むと理屈っぽかったり、ツメが甘かったり、大風呂敷広げすぎたりとハチャメチャだったが、その時点での自分の信仰の形の精一杯の表出だった。

　苦労自慢のようだが、奨励の準備は大変だ。大変すぎて、土居兄に泣き言を言ったこともあった。土居兄は「今はしんどいけど、それは必ず恵みになっていくから！」と励ましてくれた。今振り返ると、ほんとうに、ほんとうにそうだった。未熟な私に奨励が課されたことは恵みそのものだった。

　何を語るか、どういう流れにするか黙想し、調べ、文章にしていく。その過程の中で、時には思いがけないストーリーが導かれてくることがあり、不思議だった。黙想と聖書を読むことを繰り返すうち、これまで実感のなかった聖書の御言葉が自分に迫ってくるのを感じた。そしてもっとも大きな恵みは、奨励を終えたその瞬間から始まる。それは次回なにを話そうかなと考え始めることだ。

　仲間たちに話したいこと、分かち合いたいこと、気に止めなければ行き過ぎていくようなことを、一つ一つ記憶にとどめようとする。その営みは、まさに主の恵みを数えることだった。

今、私の奨励のネタ帳は、神様から頂いた恵みで満杯である。この恵みをみなさんと存分に分かち合える日を楽しみにしている。

## 証し　K. O. 姉

岡山に来てからあっという間に４年が経とうとしています。この４年間、岡山教会の皆さまにはたくさんお世話になりました。娘や孫のように気にかけていただいたこと、感謝でいっぱいです。

初めてこの教会に来た際、お昼以降も午後まで交わりに加えていただいたことを今でも覚えています。とても嬉しかったと同時に、初めての教会にも関わらず居心地の良さを感じたことに、私自身驚きました。1 年目の夏には教会学校の交わりに加えていただき、教師としてのご奉仕をはじめました。初めての教会学校の奉仕で分からないことも多々ありましたが、周りの先生方や子どもたちのご家族、教会の皆さまのお祈りにとても励まされました。戸惑うことはありましたが、目の前の子どもたちは自分の弟妹のようにかわいく、今でもみんなのことが心から大好きです。

この４年間を振り返ると、私の信仰生活は安定していたとは言い難いものでした。教会に行けなかった時期もありましたし、神さまと素直に向き合うことが難しい時期もありました。それでも神さまは何度も礼拝やクリスチャン仲間の交わりに招いてくださいました。その度に学ぶことがあり、自分の罪に気づかされることもありました。目を逸らしたくなるようなこともありましたが、ネガティブなこともポジティブなことも神様から与えられた経験だったと思います。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。
主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。（詩篇 103:2）

たくさんのことが与えられてここまで生きてきました。どうやってお返ししたらいいか分からなくなることも多々あります。神さまから与えられた恵みの一つ一つを覚え、感謝し、お返ししていける歩みにしていきたいと思います。

岡山に帰れる場所が与えられたのも、また一つの恵みです。
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

## 2021 年「2.11 集会《平和集会》「コロナ禍における教会の使命」

**発題者①吉田隆牧師（神戸改革派神学校校長）**
**「コロナ禍の社会における教会の使命」**
古代紀元 3 世紀中頃、アフリカから始まり一日に 5 千人近い死者を首都ローマにもたらした疫病が、古代ローマ世界を恐怖に陥れた。カルタゴの司教キプリアヌスは、聖書より、病にかかり苦しみ死ぬことは万人に共通であるがキリスト者はその精神によって異なることを力説した。信仰によって、死の恐怖を乗り越えることを説いたのであった。マルティン・ルターの時代、彼は困難な時こそ神の召しに忠実であれと説き、ヨハネ福音書 10:11 を引用し、聖職者が果たす働きを伝えている。
現代においては「教会の信仰と生活を見つめ直す良い機会」として捉えている。

**②松浦悟郎司教（ローマ・カトリック司教）**
**「全体主義傾向下におけるキリスト者の使命」**
例年、2，11 集会は「信教の自由を守る日」を覚え平和集会を開いてきた。世界の現況は自国ファーストが叫ばれ、格差社会が到来し、多様性を認めない風潮があるのも事実。
そうした中、全体主義が横行している。しかし、民主主義は全体主義と異なると松浦司教は語る。今日のキリスト教会の果たすべき使命は、主イエス・キリストのもたらされた福音に根拠をおいて歩む必要がある。

**③土居弘幸医師《岡山大学大学院特命教授》**
「コロナを正しく恐れる『コロナ終息へのプロセスと対応』と題し、感染症の専門家として、発題された。9 ページに及ぶ膨大な資料を駆使して説明され、一同大いにうなずく次第であった。新型コロナウイルスのワクチン接種は可能な限り接種が推奨された。最後に、福音とは何か？と問われ、私たちに何ができるのかと問われた。
また、人は一人で生きていけない者であり、常に他者と共に生きていることを実感したいものである。

（報告者　永松清）